九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

補文内倒置と言語多様性(1) : 間接疑問文とCP構造

稲田, 俊明
九州大学大学院人文科学研究院文学部門言語学 : 教授 : 生成文法, 英語統語論

https://doi.org/10.15017/1177

出版情報 : 文學研究. 98, pp.1-27, 2001-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

補文内倒置と言語多様性（1）

── 間接疑問文と CP 構造 ──

稲　田　俊　明

0．はじめに

間接疑問文の倒置に関する英語の事実を観察しそれらをよりよく説明する方法を探索する。また、英語の補文内倒置を説明する理論を考える際に参考となると思われるスペイン語の興味深い補文倒置のパターンについても考察する。そして、そのような補文内倒置あるいは「補文における主節現象」の問題に対するよりよい解決法を見つけるために、まず、CP-構造に関する提案や最適性理論に基づくアプローチを批判的に検討する（その１）。次に、そのような問題点を克服して、補文内倒置に自然な説明を与えることのできる文法モデルを示唆したい（その２）。

1．現代英語における間接疑問文の変種

間接疑問文における主語・助動詞倒置のデータを見てみよう。(1)は、倒置のない“標準的”な間接疑問文、以下では仮に「標準英語」（SE）の関節疑問文と呼ぶものである。しかし、現代英語の資料のなかには、(2) (3)のような倒置を含む間接疑問文が観察される（文中の［...］は、問題となる間接疑問節を示すために筆者が挿入したもの）。

(1)　a．I wonder when he came back.

　　b．*I wonder when did he come back.

(2) a. A seedy-looking man was sitting in the first row at a town meeting, heckling the mayor as he delivered a lengthy speech. Finally the mayor pointed to the heckler and said, "Will that gentleman who differs with me please stand up and tell the audience [what has he ever done for the good of the city]?" "Well, Mr. Mayor," the man said in a firm voice, "I voted against you in the last election." (*Readers Digest*, Dec. 1997 : 36)

b. Will you tell the committee, Mr. McCord, [why, after a lifetime of work as a law enforcement officer without, as you have testified, any blemish on your career, did you agree with Mr. Liddy to engage in his program of burglaries and illegal wiretapping and specifically the two break-ins on May and June 17 of the National Democratic Committee headquarters at the Watergate]? (*WGH* : 147)

(3) a. I am not asking specifically what the types were, but [how were they to be used], [where were they to be placed from your understanding?] (*WGH* : 146)[1]

b. All this brings me back to high school guru Ted Sizer's basic question about education. He writes, "It's not just what we want our kids to know when they graduate from high school, but rather [what kind of people do we want them to become?]" (*Belmont High School Newsletter*, Feb. 1999 : 2)

以下の節では、このような現代英語に見られる倒置された間接疑問文の特徴とそのような構文を許す話者の文法とを考察する。この「構文」は、非常に“口語的”な文体で限定的に出現するが、後に述べる英語の方言においては自由に許されるオプションである。また、類似の倒置現象は間接疑問文を

習得する途上の子供に頻繁に見られる特徴でもある（Inada and Imanishi 1997, Inada 1997a, MacWhinney 1995)。従って、通常は標準英語を話す話者に観察される上記の表現についても、単なる運用上の「誤用」と見なすより、文法の中でその分布や特性を述べるのが妥当であると考えられる。

また、後半で詳しく見るように、スペイン語の方言においては、間接疑問文の倒置は複雑なパターンを示す。Bakovič (1998) は、それらの倒置パターンは、「最適性理論」(Optimality Theory) によってよりよく説明できると主張しているが、そのような主張が妥当ではないことも示したい。英語の変種における埋め込み文の倒置もスペイン語の一見複雑な倒置パターンも、基本的には類似の原理が働いていると考えられる。CP-構造に関する Rizzi (1997) の提案なども検討しながら、埋め込み構造に関する問題を探索したい。

2．EIEQ の特徴

間接疑問文において (2) (3) のような倒置を許す英語を、便宜的に“間接疑問文の倒置オプションを持つ英語” (English with Inverted Embedded Question: EIEQ) と呼ぶことにする[2]。このような英語の変種 (EIEQ) は、興味深い特徴を示す。

まず第一に、文主語の位置で倒置が起きることはない。その分布は動詞句内補部（つまり内項）に限定されている。例えば、下記のような例は、資料には見つからないし、英語の母語話者にとって、明らかに (2) (3) とは異なる文法的逸脱感が感じられる。

(4) a．*[what has he ever done for the good of the city] does not matter at all.

b．*[Why did you agree with the secretary] has been a great mystery.

EIEQ の第二の特徴は、主節動詞が know, remember, forget などの叙実述部である場合には、間接疑問文の倒置は観察されない。また、そのような倒置文は母語話者にも全く許容されない。

(5) a. We all know [what he has done for the good of the city].
b. I remember [why you agreed with the secretary].
(6) a. *We all know [what has he done for the good of the city].
b. *I remember [why did you agree with the secretary].

SE の話者も、ほとんどが (2) (3) と(6)との容認度の相違を認め、後者は前者と異なり全く容認されないという明確な判断を示す[3]。下記の文を比較してみよう。

(7) a. He asked did I appoint Tony.
b. She wants to know who did I appoint.
(8) a. *She already knows who did I appoint, so you needn't dissemble any longer.
b. *He's figured out did I appoint Tony, but he promised not to tell. (Green 1981)

Georgia Green は、(7) のような補文倒置のオプションを許す話者の一人であるが、(8)は容認されないと述べている（Green（1981：28））。

第三の特徴は、(3)の例が示すように、not A but B のような表現では、A の位置で倒置が観察されることはなく、全てB位置における倒置だという点である[4]。

(9) a. The question is not [just what we want our kids to know when

they graduate, but rather [what kind of people do we want them to become].

b．??The question is not [just what do we want our kids to know when they graduate, but rather [what kind of people we want them to become].

このようなEIEQにおける事実は、「前景化」(foregrounding) あるいは「焦点化」(Focusing) と補文倒置との間に何らかの関係がある可能性を示唆している。従って、EIEQが一般的にどのような環境で生起するか、なぜそのような環境で補文倒置が起きるのか、またどのような埋め込み構造を仮定すれば補文倒置 (I-to-C 移動) が可能な環境を説明することできるのかなど、英語のCP構造に関する重要な問題を提供していると言える。

埋め込み文におけるこのような「主節現象」(“Root Phenomena”) の一種として否定の倒置 (Negative Inversion) が知られている。否定倒置はSEの補文でも広く観察されるが、その分布に制約があり、一般的に「断定述部」(assertive predicate) の補文には生起できるが、真叙実述部 (true factive predicate) の補文などを含む非断定述部の補文では容認されないとされている。また、(11)のように文主語や名詞補文の位置でも容認性は下がるとされている (Hooper and Thompson 1973, Hooper 1975)。

(10) a．He {said/claimed} that never in his life had he seen such a crowd.

b．*He {was surprised/regretted} that never in his life had he seen such a crowd.

(11) a．*That never in his life has he had to borrow money seems to be strange.

b．*The assumption that never in this situation can the accident

happen seems to be true.

ところが、例えば、(12a) のような半叙実述部 (semi-factive predicate) の補文では、EIEQ の倒置は決して起きないが、否定倒置は可能である。また、(12b) のような名詞補部においても、調査によると、否定倒置を許す母語話者もいる。(12c) の非制限関係節の中でも否定倒置が生じることがある。

(12) a. Leslie found out that never in his life had he seen such a crowd.
b. The fact that never has he had to borrow money makes him very proud.
c. Leslie, who under no circumstances would I trust, asked for a key to my room.

(10a) における否定倒置は、CP—NegP—IP という機能範疇の必要性と、NegP-Head への I-移動とを示していると言えるかもしれない (Haegeman 1995)。しかし、SE において NegP が否定倒置を認可できる補文の分布は、EIEQ の疑問文倒置が許される環境と同じものではない。つまり、疑問文のような「節タイプ」(clause-type) や「発話の力」(force) が関わる構文は、否定倒置のような平叙文内の特殊効果構文とは分布が異なる[5]。このような文の左端 (left periphery) の構造に関わる機能投射の問題は、後の節でまた少し詳しく議論したい。

3. 英語の方言と 2 つの "間接疑問文"

3-1. Hiberno-English

McCloskey (1992) は、アイルランドで話されている英語方言 Hiberno-English (HE) における間接疑問文の倒置と補文構造の問題を詳しく論じて

いる（Henry 1995, Inada and Imanishi 1997参照[6]）。

HEの間接疑問文の倒置の分布を見てみよう。

(13) a. I wondered [was he coming to meet me].
b. I asked [when would he come back].

(14) a. *[Was John leaving] is not clear.
b. *[When would he come back] was not very important.

(15) a. *They were wondering about [when did he come back].
b. *It is not clear [when did he come back].

EIEQの場合と同様に、上記の［...］で示された倒置節は直接引用（direct quote）ではない。(13)が示すようにいわゆる時制の一致や代名詞の転換を含めて「埋め込み構造」の一般的な特徴を持っている（Henry 1995）。興味深いのは、この方言でも、(14)が示すように主語節の中では倒置は起きない。また、(15)が示すように前置詞句内や外置節においても倒置は容認されない。

主節動詞も補文倒置と関連がある。まず、叙実動詞の補部では倒置は許されないのは、EIEQと同様である。

(16) a. *I have found out [would he come back].
b. *I remembered [when did he leave].

しかし、下記のような環境では、主節が叙実動詞を含んでいても倒置が許されることがある（McCloskey 1992）。

(17) a. Do you remember [did they live in Boston] ?
b. I've never found out [would he have come with me].
c. She wants to know [who did I appoint].

(McCloskey 1992)

叙実動詞を含む(17)の主節は、「疑問」「否定」「願望」などの文脈に生起している。もし、全ての節にその出来事が実現したかどうかに関する「イベント特性(±EF)」が与えられているとすれば、(17)のような疑問や否定等を含む主節のCPでは、イベントの非実現性を示す［−EF］という指定が与えられるであろう（Inada（1999）参照)。このような主節述部の補文には、前節で観察したEIEQにおいても、一般的に補文倒置の随意的な生起が観察される。

以上述べたように、EIEQの倒置あるいはI-to-C移動が可能な環境は、McCloskey（1992）で指摘されたHiberno-Englishにおける倒置の環境と共通である。

3-2. 間接疑問文の2つのタイプ

EIEQ/HEで補文倒置が生じる環境は、簡単に言えば、独立疑問文と共通の意味的環境である。その環境は、Green（1981）によると、“the referent of the subject (or experiencer) of the verb embedding the question is presumed not to know the answer (Green (1981 : 28))”の場合であり、Suñer（1993）が「真の間接疑問文」(Genuine Indirect Question: IQ）と呼んだ補文が生起する環境である(Baker 1968, Suñer 1991, 1993, Inada and Imanishi 1997, Inada 1999)。Suñer（1993）に倣って、このような環境に生じる間接疑問文を単にIQと呼び、叙実述部の補部のように、主語が疑問詞の値を知っている場合を「擬似間接疑問節」(Semi-Indirect Question: SIQ）と呼ぶことにする。

IQでは、疑問詞の値を知らずにその値を求めているので、「発話の力」としては独立疑問文と同じである。つまり、IQが生起する環境は、埋め込まれていてもそのような「発話の力」が発揮できる位置であることになる。このこ

とは、例えば、独立疑問文に生じる否定対極表現（NPI）が許されるのはIQの場合であり、SIQでは許されないということからも分かる。

(18) a. I wonder what John has ever done there
b. I remember what John has (*ever) done there.
c. Do you remember what John has ever done there ?

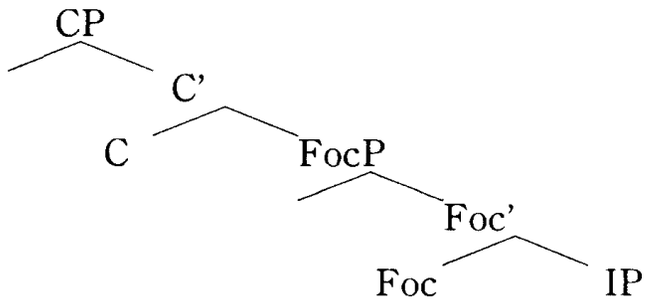
(19) a. [一体誰をパーティに呼んだのか]（と）尋ねた。
b. [(*一体) 誰をパーティに呼んだのか] 知っている/憶えている。
c. [一体誰を呼んだのか] 知らない/知りたい/知っていますか。

従って、埋め込み文においてIQが誘発される位置がどのような“統語的環境”であるかが統語論においては問題になるであろう。

4. CP-構造と補文倒置

Rizzi (1997) は、イタリア語、スペイン語、フランス語、英語等について、補文内の話題（Topic）や焦点（Focus）を示す要素の分布を説明するために、従来のCPに加えて（あるいはCPを分割して）TopP（Topic Phrase）、FocP（Focus Phrase）を仮定すべきであると主張している。つまり、節タイプや発話の力を表すCPと時制や定形・非定形の区別を示すIPの間に、焦点と話題を認可する機能範疇が必要であるとして、下記のような構造を仮定している（以下では、TopP（Topic）は省略する）。

(20)



このような構造が焦点句の認可に関して妥当であるかどうかは、本論の問題とは独立に検討の余地がある。しかしFocPを持つCP構造とEIEQの分布に相関性があるかどうかを探るのは、興味深い問題である。

FocPに関する類似の主張がManzini (1998) にも見られる。叙実述部の補文は、要素の摘出を選別的に阻止する弱い叙実島 (factive islands) を形成している。Manzini (1998：202) は、そのような叙実島における付加部 (adjunct) の摘出制限は、摘出を阻止する主節中のFocus要素を仮定することにより説明されると主張している。下記のようなWH-島、否定島と叙実島を比べてみよう。

(21) a. *Why do you know [if they fired him t_{why}]?
b. *Why don't you believe [they fired him t_{why}]?
c. *Why do you regret [that they fired him t_{why}]?

(22) Weak Islands Generalization
*(Op, ..., Op, ..., vbl)

(23) Minimality
Given an attractor feature F and an attractee feature AF, F attracts AF only down to the next attractor F' for AF.

Manzini (1998：199-200)

Manzini (1998) は、Chomsky (1995) のMinimal Link Condition (MLC) を(23)のように修正すれば、(21)の事実を統一的に説明できると主張する。(21a) では、ifによって（つまり補文のCPにある牽引子の素性によって）主節CPからの疑問詞の牽引が阻止される。また、(21b)においても、主節CP中の牽引子による補文中の疑問詞（[+indef]）の牽引は、NegPの中にある牽引子によって阻止される。同様に、(21c) の叙実島からの疑問詞の摘出は、主節中にある何らかの牽引子によって阻止されているとManziniは仮定し、

それは Focus Attractor であると主張する[7]。

(24) a. [do-Q] [you [F regret [that they fired him why]]]
b. *Why do you think [that only him they would fire t_{why}]?
(Manzini (1998：202-203))

Manzini は、(24a)のように叙実述部は何らかの F－指定を持つことにより、前提となる叙実補文を認可する（つまり、叙実述部の補文は「前提」をなしている点で他の Topic と類似しているが、それは主節の Focus の存在によって認可されている）と仮定する。Manzini によれば、このような「焦点島」(Focus Islands) の存在は、(24b) のように補文中の焦点句が付加部の摘出を阻止することによっても示されるという。

では、このような FocP は、間接疑問文における倒置を許す環境を与えるであろうか。CP—FocP—IP という機能投射を認めると、まず、(a)補文内での I-to-C 移動が可能となる。つまり、基本的に CP-recursion 説(IP の上位に 2 つの CP 投射を持つ節があると仮定する説) と同様に、(主節動詞に選択された上位 CP 主要部への I-to-C 上昇は阻止されるが) 下位 CP あるいは FocP への I-to-C 移動が可能となるので、補文内でも原理的に倒置が許されることになる (McCloskey 1992)。

(25) I wonder [$_{CP}$ [C] [$_{FocP}$ who [$_{Foc}$ [+WH] will] [$_{IP}$ John t_{will} meet]]]
└----select----┘

更に、(b)CP-recursion 説では原理的に説明できなかった「double-CP 構造が許される補文とは何か」という問いに対して、FocP を含む補文であると答えることができる。以下では、(b)の答えの妥当性を検討してみよう。

EIEQ の特徴は、(i)倒置は動詞補部のみで生じ、主語節などには生じない、(ii)叙実述部の補部には倒置は起きない、但し、(iii)叙実述部が「否定」「疑問」

「願望」などの文脈にある場合(仮に[－EF]の指定を持つとしておく)、ask/wonder-類の疑問動詞の場合と同様に倒置が容認される、などの点であった。

まず、(i)の動詞補部では一般的に焦点化あるいは前景化することができるが、主語節は「前提」となり、焦点を含むことができない（Erteshick-Shir 1997)。このことから、文主語となるCPにはFocPが投射できない(または焦点が認可されない）と考えられる[8]。

(26) a. I think [that only your book he really wanted to read].
b. They believe [that only for this reason they would hire the people].

(27) a. *[That only your book he really liked] seems to be true.
b. *[The fact that only to Sue he gave the book] surprised us all.

(28) a. ...V [$_{CP}$ [$_{FocP}$ [X] [$_{IP}$...]]]
b. *[$_{CP}$ [$_{FocP}$ [X] [$_{IP}$...]]]...V...

しかしながら、(ii)(iii)に関しては、半叙実述部とFocP投射との関連性は単純ではない。つまり、半叙実述部は断定述部としての解釈を持つので、その補文を前景化することにより(29)のような要素の焦点化や話題化が可能である。しかし、(30)が示すように、半叙実動詞補部ではEIEQの倒置は容認されない。

(29) a. They found out that each part he had examined very carefully.
b. I remember that only for this reason they fired the employee.

(30) a. *They found out how did he examine each part. (EIEQ/HE)
b. *I remember why did they fire the employee. (EIEQ/HE)

(31) a. They found out how he examined each part.
b. I remember why they fired the employee.

一方、ask/wonder-類の疑問動詞の補文では、EIEQ は自由に倒置を許すが、話題化などによる前景化は（30a）が示すように容認されない。

(32) a. *I wonder who, this book, would buy around Christmas.
b. ??I wonder where, each part, he had examined.
c. I wonder who, around Christmas, would buy this book.
(Rizzi（1997：309))

(32c)が容認されるのは、副詞句の前置は項の話題化とは異なることを示している（但し、調査によると、(32b)、(32c) の相違は認めるものの、両者とも容認性は低いと答えるインフォーマントもいる)。

更に、発話伝達動詞や半叙実動詞は、疑問、否定、命令、願望などを含む［−EF］−文脈では、(33)のように倒置が可能であった。従って、これらの事実と FocP（あるいは TopP）の分布とを関連付けるためには、(34)のように指定する以外にない（[＋α] は、便宜上、叙実動詞の持つ素性とする)。

(33) a. Do you remember why did they fire the employee ?
b. Tell me when did he examine each part.

(34) a. ...V [＋α]...*[$_{CP}$ [$_{FocP}$ [X] [$_{IP}$...]]]
b. ...[−EF]...V [＋α]...[$_{CP}$ [$_{FocP}$ [X] [$_{IP}$...]]]

換言すると、(34b) の環境は、基本的に ask/wonder-類の疑問動詞の補文と共通の特性を持つことになる。しかし、(32)が示すように、後者の動詞類の補文が前景化を許すとは言えない。このことは、(真叙実述部と異なり)半叙

実述部が断定述部の特性を持つこと、つまり補文内を前景化して焦点化や話題化をすることを許すという特性を持つことと、間接疑問文における倒置を誘引することとは、直接的な関連性は薄いということを示している。従って、この方向からEIEQに自然な説明を与えることは困難であると結論付け、他の説明の可能性を探ることにする[9]。

5．スペイン語方言の間接疑問文

Bakovič (1998) によると、スペイン語方言の間接疑問文は興味深い倒置パターンを示す[10] (Suñer 1994, Torrego 1984, Bakovič 1998)。まず、独立疑問文について、英語の倒置の場合と比べてみよう（AG＝argument, AD＝adjunct, V＝verb, S＝subject)。

(35) Subject-Aux Inversion in English

a．*John ate {what/where/how/why}?

b．*{What/Where/How/Why} John ate ?

c．{What/Where/How/Why} did John eat ?

(36) Subject-Verb Inversion in Spanish (Dialect F)

a．¿Qué se comió Miguel ? (AG$_{[WH]}$—V—S)

what ate.3s M

"What did Miguel eat ?"

b．*¿Qué Miguel se comió ? (*AG$_{[WH]}$—S—V)

what M ate.3s

"What did Miguel eat ?"

c．¿Dónde Miguel se fue ? (AD$_{[WH]}$—S—V)

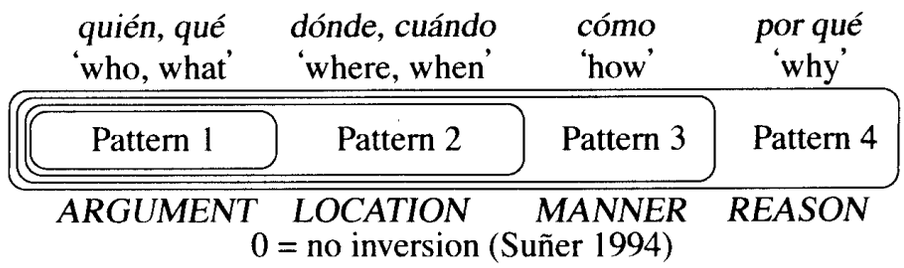
where M went.3s

"Where did Miguel go ?"

英語の独立疑問文では、問い返し疑問（Echo-Question）の場合を除けば、WH-移動に伴い必ず助動詞上昇が起きる。一方、スペイン語方言では、項のWH-移動は動詞上昇を誘発するが、(36)が示すように、付加部のWH-移動は動詞上昇を起こさないことがある（仮に、Dialect F と呼ぶことにする）。

このような倒置における項と付加部の相違は、実は、更に複雑であるが、一般的に下記のような疑問詞タイプと倒置パターンの含意関係（Implicational Relationship）が成り立つ（Suñer 1994, Bakovič 1998）。

(37)



独立疑問文における倒置パターンは、全く倒置を起こさない変種を Pattern 0 として含めると、5 通り存在する(Suñer 1994)。このうち、例えば、Pattern 2 の倒置を示す方言では、上記図の階層関係において場所•時の疑問詞まで倒置を誘発する。つまり quién（'who'）、qué（'what'）だけでなく、dónde（'where'）、cuándo（'when'）も倒置を起こすが、cómo（'how'）、por qué（'why'）では倒置は起きない。一方、Pattern 4 の方言では、英語同様に、全ての疑問詞移動が倒置を引き起こす。

では、次に間接疑問文の倒置パターンを見てみよう（Dialects F, G, M などについては、後に示す表(42)を参照）。

(38) Indirect-Q in Dialect F

a. Me pregunto [qué Miguel se comió]. ($AG_{[WH]}$—S—V)
wonder.1s what M ate.3s
"I wonder what Miguel ate."

b . Me pregunto [dónde Miguel se fue] (AD[WH]—S—V)
wonder.1s where M went.3s
"I wonder where Miguel went."

(39) Indirect-Q in Dialect G

a . Me pregunto [qué se comió Miguel]. (AG[WH]—V—S)
wonder.1s what ate.3s M
"I wonder what Miguel ate."

b . *Me pregunto [dónde se fue Miguel] (*AD[WH]—V—S)
wonder.1s where went.3s M
"I wonder where Miguel went."

(40) Indirect-Q in Dialect M

a . Me pregunto [qué se comió Miguel]. (AG[WH]—V—S)
wonder.1s what ate.3s M
"I wonder what Miguel ate."

b . Me pregunto [dónde se fue Miguel] (AD[WH]—V—S)
wonder.1s where went.3s M
"I wonder where Miguel went."

間接疑問文における倒置パターンは、一見するところ、更に複雑である。Dialect F では、独立疑問文で項の WH のみが倒置を誘発したが、(38a) (38b) が示すように、間接疑問文では項も付加部も倒置を誘発しない。一方、(39) が示すように、他の方言 Dialect G においては、間接疑問文においても項の WH のみが倒置を誘発する。更に、別の変種である Dialect M では、項のみならず付加部 WH（の一部）も倒置を引き起こす。しかしながら、一見複雑に見えるこれらの間接疑問文における倒置パターンは、それぞれの方言における独立疑問文の倒置パターンと関連していて、下記のような一般化ができる（Bakovič 1998）。

(41)　各方言において、間接疑問文で倒置が生じるのは、独立疑問文で生じる場合の部分集合である。

つまり、その方言の独立疑問文（Matrix-Q：MQ）で倒置が可能である場合のみ、間接疑問文（Subordinate-Q：SQ）でも倒置の可能性が生じることになる。(41)は、論理的に可能な倒置パターンのなかで、実際に存在する方言は下記の表で示されるものだけになることを述べたものである。

(42)　Conceivable Dialectal Possibilities (actualities boxed):

Dialects	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y
Matrix	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4
Subordinate	0	1	2	3	4	0	1	2	3	4	0	1	2	3	4	0	1	2	3	4	0	1	2	3	4

(Bakovič 1998)

この表は、MQの5パターンの倒置可能性に対して、SQでは25パターンの倒置可能性が論理的には存在するが、実際には□で囲まれた15通りの方言のみが存在することを示している。問題は、なぜこのような倒置パターンが起きるかに関する原理的な説明が与えられるかどうかである。 換言すると、(41)のような記述的一般化（descriptive generalization）の背後にある補文倒置に関する原理とは何か、が問われなければならない。このような倒置パターンには、埋め込み構造におけるある種の「経済性の原理」が働いている。このような経済性の問題は、Inada (1999b, 2000) で示唆したように、言語獲得の問題として解決するのがよいと思われる（Inada（to appear））。

一方、このような一見複雑な倒置パターンは、「原理とパラメータのアプローチ」におけるパラメータ値の設定によって説明するのは難しい（Inada（1999b, 2000））。また、「最適性理論」（OT）による接近法も、下記に述べるように、自然な説明を与えるものとは言えない。

Bakovič (1998) は、「制約の階層化」の相違により、上記の倒置パターンが全て説明できると主張している。つまり、スペイン語の各方言は、補文倒置に関連する普遍文法の制約（仮に、Con A, Con B, Con C,...etc.）に対して、下記のように異なる階層化を行うことにより異なる倒置パターンを生み出していると仮定する。

(43) Dialect α：A > B > C...
Dialect β：B > A > C...
Dialect γ：B > C > A...
...

確かに、このような制約の階層化によるアプローチでは、実際に存在する方言がもれなく記述できる。しかしながら、そのような強力な記述装置を仮定することにより、より根底的な説明的妥当性に関する問題が残される。例えば、(i)実際には存在しない倒置パターンを原理的に排除できるのか、更に(ii)許されない階層化や出力効果のない階層化を排除するために、階層化そのものに関するより一般的な「制約」が必要とならないのか、という問題である。

(ii)の問題に関して少し考察してみよう。実際に存在する出力のみを「最適出力」(optimal output) とするように制約を階層化するためには、階層化に関する一般的な条件が必要である。例えば、上記のように3つの制約を仮定したとすれば、それらに自由なランキングを許せば、6通りもの言語（あるいは方言)が可能となる。5つの制約では、5×4×3×2＝120の言語ができる。実際に存在する言語のみを有効な出力として許すためには、より高次の「制約」として、階層化に関する条件が必要となる。

例えば、間接疑問文の倒置に関する下記の簡略化した制約を考えてみよう（詳細は、Inada（to appear）で議論するので、ここでは要点のみがわかるように簡略化している)。

(44)　間接疑問文の倒置に関連した制約群

a．Move ARG：項の移動に伴い、動詞上昇（＝倒置）を起こせ。

b．Move MOD：付加部の移動に伴い、動詞上昇（＝倒置）を起こせ。

c．STAY：移動はするな。

d．PURE：補文の CP-Head への移動をするな[11]。

(44a)（44b）は、スペイン語の倒置パターンを説明するための制約である。(44c) は、移動はコストが高いことを示す制約である。(44d) は、一般的に OT で使われる補文倒置を制御する制約である。これは、「経済性の原理」に還元できるが、便宜上このままの制約を仮定する。

まず最初に、主節における簡略的な倒置パターンを制御するランキングとして、下記のようなものが考えられるであろう（以下では、ARG＝Move ARG, MOD＝Move MOD のように表す）。

(45)　a．**STAY** ＞ ARG ＞ MOD　（＝＞Dialect α）

b．ARG ＞ **STAY** ＞ MOD　（＝＞Dialect β）

c．ARG ＞ MOD ＞ **STAY**　（＝＞Dialect γ）

(45a) は、STAY が最上位にあるため、項も付加部も倒置を誘発しない。(45b) は、STAY よりも AGR が上位にあるため、項のみが倒置を起こす。(45c) では、STAY が最下位にあることにより、項も付加部も倒置を起こす。独立疑問文においては、この 3 通りのみが実際に存在するオプションであると考えてみよう（どのアプローチにおいても、(45) の効果をもつ制約は必要となる）。問題は、間接疑問文におけるランキングの場合である。論理的な可能性としては、下記のようなランキングが可能である。

(46) Dialect α

a. **PURE** > STAY > AGR > MOD (=>Dialect 1)

b. STAY > **PURE** > AGR > MOD

c. STAY > AGR > **PURE** > MOD

d. STAY > AGR > MOD > **PURE**

(47) Dialect β

a. **PURE** > ARG > STAY > MOD (=>Dialect 2)

b. ARG > **PURE** > STAY > MOD (=>Dialect 3)

c. ARG > STAY > **PURE** > MOD

d. ARG > STAY > MOD > **PURE**

(48) Dialect γ

a. **PURE** > ARG > MOD > STAY (=>Dialect 4)

b. ARG > **PURE** > MOD > STAY (=>Dialect 5)

c. ARG > MOD > **PURE** > STAY (=>Dialect 6)

d. ARG > MOD > STAY > **PURE**

ARG>MOD のランキングは固定しているので、補文内の倒置パターンの論理的な可能性は、上記の12通りである。ここで重要なのは、12の可能性のうち、右端に番号（Dialect n）を付した6通りのパターンのみが有効な階層化となり、その他の場合は、制約の階層の如何にかかわらず、異なる出力（つまり方言）を生み出さないことである。例えば、(46)は、全て同じ出力（つまり主節も補文も倒置を起こさない方言）となる。同様のことは、(47b, c, d)についても、(47c, d) についても言える。つまり、複雑なランキングの可能性があるにもかかわらず、実際に出力として効果があるのは、数少ない組み合わせのみである。その理由も明らかである。(44)の制約群には、その階層化に関する一般的な制約があり、その制約を守る場合のみ、異なる出力を生み出すからである。

(46)を点検してみよう。

(50)＝(46)　Dialect α

a．**PURE**＞STAY＞AGR＞MOD

b．STAY＞<u>**PURE**＞AGR＞MOD</u>

c．STAY＞<u>AGR＞**PURE**＞MOD</u>

d．STAY＞<u>AGR＞MOD＞**PURE**</u>

STAY と PURE の関係は、前者が「全ての移動を制約する」働きをし、後者が「補文内の CP-主要部への移動を制約する」働きを持つ。このことから、上に下線で示したように、前者が後者より上位にあれば、後者つまり PURE はその効果を失う。

つまり、下記のような関係が成り立つ。

(51)　Pure-Head Effect:

下記のランキングでは、PURE の効果がない。

(a)　STAY　＞（...＞）PURE

下記のランキングのみが、PURE の効果がある。

(b)　PURE　＞...＞　STAY

(51a) では、STAY より下位にランキングを持つ PURE は、その他の制約とどのような階層関係を持っても、結局は倒置効果がないことを述べたものである(PURE が STAY より上位でも、両者が隣接していれば倒置効果は生じない場合がある)。余剰的であるが、(51b) のように、PURE が STAY の上位に隣接せずに位置する場合のみに、倒置効果が現れる。つまり、(51b) の 2 つの制約に挟まれた場合にのみ、主文での倒置が許され、補文内倒置が抑えられる。同様のことは、(47) (48) の場合にも成り立つ。このことは、(46)-

(48)のような制約の全ての組み合わせを羅列するランキングは、単に図(42)の言い換えに過ぎず、重要な“一般化”を見逃している。

言語習得の観点から(46)のランキングの問題点を考えるとよくわかるであろう。(46a)－(46d) は、異なる制約（ordered set）を持つために、4つの異なる文法となる（論理的な）可能性があるが、子供は無駄にそのような文法（つまり階層）を習得するであろうか。子供は、ある種の制約群（family of constraints) については、全ての組み合わせの可能性を検討する必要はなく、むしろ(51)のような“ランキング制約”を用いた簡略化を行うであろう。このことは、とりもなおさず、可能な倒置パターンとは一般的にどのような特性を持つかという根底的な問題について、現在の最適性理論が十分な説明力を備えていないことを示すものである。

スペイン語の倒置パターン全般に関する、最適性理論に基づく説明の詳細とその問題点については、ここではこれ以上追求せず、稿を改めて詳しく議論することにする（Inada 2000, Inada（to appear))。

6．結びに代えて

本稿では、英語の間接疑問文の倒置に関する事実を観察し、その分布に関する興味深い特徴を説明する方法を探索した。まず、本文中で EIEQ と呼んだ英語の変種は、Hiberno-English を含め他の英語の方言に見られる特徴を持っていることを述べた。次に、埋め込み文における「主節現象」を説明するために、CP-構造における機能範疇の一つとして FocP を仮定するという分析を概観し、そのような機能投射の分布上の制約により、補文倒置の問題が説明できるかどうかを検討した。結論として、FocP の分布(あるいは FocP による認可条件)は間接疑問文を認可する補文の分布とは同じではないので、そのような機能範疇を仮定しても、補文内倒置現象に有効な説明を与えることができないことを述べた。最後に、スペイン語方言の間接疑問文の倒置パターンについて、Bakovič (1998) が最適性理論により説明できると主張して

いることから、それらの根拠となるスペイン語方言の基本的な事実を概観した。しかし、階層化された制約は記述力が強すぎ、異なる出力を生じない不必要なランキングを制御するためのより強力な“制約”がなければ、補文内倒置に自然な説明を与えることができないことを指摘した。　実際の Bakovič (1998) の分析と具体的な問題点、補文倒置を説明するよりよい解決法については、Inada（to appear）で詳しく議論したい。

注釈

1　*WGH = The Watergate Hearings: Break-in and Cover-up*, The New York Times.

2　ここで仮に EIEQ と呼んでいるのは、いわゆる“Standard English”の変種で、後に述べる Hiberno-English、Black English、あるいは Belfast English (fn. 6) などとは異なるものである。また、ここで便宜的に SE (“Standard” English) として言及するものは、その話者が地域的なまとまりをなすことを意味しない。したがって、General American などと呼ぶより、SE として言及することにする。
　英語の歴史資料における間接疑問文の倒置については、Visser（1963-1973; 780-781), Jespersen (1927: 44-45) 参照。また、現代英語の地域方言については、Henry（1995), Filppula（2000）参照。

3　Ken Hale 氏（MIT での個人的会話）は、(2)の例を見て、自分は（ここで言う EIEQ を）使わないが、「妻はそういう言い方をよくする。」とコメントしてくれた。また、叙実動詞の補部に埋め込まれた EIEQ については、誰も容認しないだろうと述べた。

4　資料の（3b）は、高校のニューズレターから抽出したものであるが、実は、この前の号で父兄から同趣旨の寄稿文があり、（3b）の筆者はそれから引用している。ところが、前号の父兄の文には(i)に示したように倒置がない。興味深いのは、(3b)の筆者は倒置の無い文を参照しながら、“焦点”の部分のみを倒置にして“引用”しているようにも見える点である。

(i)...“The question,” he (= Ted Sizer, director of the Coalition for Essential Schools) writes, “is not what we want our children to know when they graduate, but what kind of people we want them to become.” (*Belmont High School Newsletter*, Dec. 1998)

5　一方、Sells et al.（1996）で指摘されている、AAVE（African American Vernacular English）の Emphatic Negative Inversion は、発話の力と関係があり CP 構造との関連で興味深い。

(i)　a. Ain't no white cop gonna put his hands on me.

b . Can't nobody never told me what to do.

(ii) a . I believe [ain't nobody leaving].

b . *I believe [that [ain't nobody leaving]].

(iii) a . I know a way [won't nobody fight].

b . *I know a way [that [won't nobody fight]].

(iv) a . It's a reason [didn't nobody help him].

b . *It's a reason [that [didn't nobody help him]].

(Sells et al. 1996)

特に重要な点は、否定の倒置と補文標識 that とは共起できないことである。つまり、AAVE の「強意否定」の倒置は、疑問文、感嘆文などと同様に、Modality と関係した構文であるので、倒置による強意効果と「発話の力」(illocutionary force) を表示する CP-内の補文表示とは、英語の CP-構造では同時に発動されることは許されない。この事実は、英語の CP-構造に関して示唆的である（Inada and Imanishi 1997)。

6 Hiberno-English は、特殊な例外ではなく、Black English など共通の特徴を持つ英語の方言は多い。Henry (1995) によると、Belfast English も類似の特徴を持っているが、叙実述部の補文や主語節などでも倒置を起こす。但し、Alison Henry 氏 とのメールでの交信によると、下記の文はいずれも間接疑問節の前にポーズがないと容認されないので、直接引用的であり、しかも容認性も低いということであった。

(i) a . ?I forgot when did he come back.

b . ?I didn't forget when did he come back..

7 Manzini (1998) では、FocP という機能投射を仮定するかどうかについては明確に述べられていない。Manzini による MLC の修正案の妥当性は、WH, NEG, Foc などの牽引子が、すべて同一素性を牽引するのかどうかにかかっている。

8 Baltin (1982) によると、(ia) のように（前景化されない）関係節において、話題化が容認されることがあるという。このような判断が正しいとすれば、関係節には（CP 以外に）TopP が投射されていることになる。しかし、(ib) (ic) は容認されない (cf. Lasnik and Saito 1992)。

(i) a . ? a man [to whom [liberty [we should grant t t]]]...

b . ?? the man [to whom [that book [I gave t t]]]

c . *a man [who [liberty [t should never grant t to us]]]

9 英語、ドイツ語のようなゲルマン語の CP 構造と、日本語、スペイン語、カシミール語などの CP-構造の相違については、Baht and Yoon (1991), Inada (1999a) 参照。

10 ここでスペイン語の方言 (dialects) と呼んでいるのは、"any variety of Spanish that is consistent with particular patterns (no claim being made about the geographical clustering) (Suñer 1994, Torrego 1984)"ということであり、それぞれの「方言」の話者が地域的にまとまっているとは限らない。

11　この制約は、Grimshaw（1997），Bakovič（1999）における、Pure Extended Projection Head（Pure-EP（H））と同じ制約であり、選択された補部の主要部（CP-Head）への I-to-C 移動の禁止を制御するものである。

参考文献

Baker, Carl. L. (1968) *Indirect Questions in English*, Doctoral dissertation, University of Illinois, Urbana.

Bakovič, Eric (1998) "Optimality and Inversion in Spanish," In Barbosa, Pilar et al. 35-58.

Barbosa, Pilar, Dannny Fox, Paul Haegeman, Martha McGinnis, and David Pesetsky (1998) *Is the Best Good Enough ?* MIT Press, Cambridge, MA.

Belletti Adriana and Rizzi, Luigi (eds.) (1996) *Parameters and Functional Heads: Essays on Comparative Syntax*, Oxford University Press, Oxford.

Bhatt, Rakesh and James Yoon (1991) "On the Composition of COMP and Parameters of V2," *WCCFL* 10. 41-52.

Baltin Mark (1982) "A Landing Site for Movement Rules," *LI* 13, 1-38.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press,Cambridge, MA.

Erteshick-Shir, Nomi (1998) "The Syntax-Focus Structure Interface," In Culicover, P. and L. McNally (eds.) *Syntax and Semantics* 29, Academic Press. 211-240.

Fippula, Markku (2000) "Inversion in Embedded Questions in Some Regional Varieties of English," In *Generative Theory and Corpus Studies*, ed. by Ricardo Bermúdez-Otero, D. Denison, R. M. Hogg, and C. B. McCully. Mouton de Gruyter, 439-453.

Green, Georgia M. (1981) "Pragmatics and Syntactic Theory," *Studies in Linguistic Sciences 11-1*. 27-37.

Grimshaw, Jane (1979) "Complement Selection and the Lexicon," *LI* 10: 279-326.

Grimshaw, Jane (1997) "Minimal Projection, Heads, and Optimality," *LI* 28: 373-422.

Haegeman, LiLiane. (1995) *The Syntax of Negation*, Cambridge University Press. London.

Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English*, Oxford University Press, London.

Hooper, Joan, B. (1975) "On Assertive Predicates," In Kimball, J. (ed.) *Syntax and Semantics* 2, 91-124. Academic Press.

Hooper Joan B. and Sandra A. Thompson (1973) "On the Applicability of Root Transformations," *LI* 4, 465-497.

Inada, Toshiaki (1997)「文法発達と英語の変種獲得」『九大言語学研究室報告』18号、九州大学文学部.

Inada, Toshiaki (1999a)「間接疑問文選択と補文構造」稲田他編『言語研究の潮流』3-19.開拓社.

Inada, Toshiaki(1999b)「埋め込み構造と言語獲得モデル」口頭発表ハンドアウト、領域探索プログラム「言語の理論脳科学」講演会、科学技術振興事業団、東京.

Inada, Toshiaki (2000)「言語獲得と埋め込み構造に関する比較統語論的研究」領域探索プログラム報告書『言語の理論脳科学』科学技術振興事業団.

Inada, Toshiaki(to appear)「補文内倒置と言語多様性(2)—言語習得と経済性—」

Jespersen, Otto (1927) *Modern English Grammar on Historical Principles*, Part 3, London: George Allen and Unwin: Ejnar Munksgaard.

Karttunen, Lauri (1977) "Syntax and Semantics of Questions," *Linguitics and Philosophy* 1, 3-44.

Lasnik Haward and Mamoru Saito (1992) *Move Alpha*, MIT Press, Cambridge, MA.

MacWhinney, Brian (19952) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ.

MacWhinney, Brian and Catherine Snow (1985) "The Child Language Data Exchange System," *Journal of Child Language* 12, 271-296.

Manzini (1998) "A Minimalist Theory of Weak Islands," In Culicover, P. and L. McNally (eds.) *Syntax and Semantics* 29, Academic Press.

McCloskey , James (1991) "Clause Structure, Ellipsis and proper Government in Irish," *Lingua* 85 (*The Syntax of Verb-Initial Languages*, ed. by James McCloskey), 259-302.

McCloskey, James (1992) "Adjunction, Selection and Embedded Verb Second," *Linguistic Research Report LRC-92-07*. UCSC.

Plann, Susan (1982) "Indirect Questions in Spanish," *LI* 13, 297-312.

Rizzi, Luigi. and Ivan Roberts (1989) "Complex Inversion in French," *Probus* 1. 1-30.

Rizzi, Luigi (1995) "The Fine Structure of the Left Periphery," In Haegeman, L (ed.) *Elements of Grammar*, Kluwer Academic Publishers, 281-337.

Rizzi, Luigi (1996) "Residual Verb Second and the WH-Criterion," Reproduced in Belletti Adriana and Rizzi Luigi (eds.) 63-90.

Rivero, Maria-Luisa (1994) "On the Indirect Questions, Commands, and Spanish Quotative *Que*, " *LI* 25, 547-554.

Sells, Peter, John Rickford, and Thomas Wasow (1996) "Optimal Theoretic Approach to Variation in Negative Inversion in AAVE," *NLLT* 14, 591-627.

Suñer, Margarita (1991) "Indirect Questions and the Structure of CP: Some Consequences," *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Hector Campos and Fernando Martinez-Gil, 283-312, Georgetown University Press, Washington D. C.

Suñer, Margarita (1993) "About Indirect Questions and Semi-questions," *Linguistics and Philosophy* 16: 45-77.

Suñer, Margarita (1994) "V-Movement and the Licensing of Argumental Wh-phrases in Spanish, *Natural Language and Linguistic Theory* 12: 335-372.

Torrego, Esther (1984) "On Inversion in Spanish and Some of its Effects," *LI* 15, 103-129.

Visser F. Th. (1963-1973) *An Historical Syntax of the English Language,* 4 volumes, Leiden: E. J. Brill.